KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

新撰圖彙 四

上文2
293-
4

門 二 2
號
卷

增補算法頼疑抄　四之巻目録

世間誤りを弗
蕎麦形を定法
煙草を定法
蚕の坪法
木挽通引を算
縦横変海道
勾股積
暦算抜きをかぐる事
曹元理が事
趙達が事
左更坊源性が事
安倍晴明が事
時を待を事
嵐義古事の事
いろは目付事

曹關疑抄

勾股積術之図
容截積別法
円切口於寸之答
二絶口色別法
三絶三色別法
二絶三色別法
円薬丸豆麦組合
円算木之術
白黒碁組合算木
盈朒別法
方臺別法
円臺別法
薬石積術之図
容截別法

塵劫記之好真数之部

勾股積
容截積
二絶口色
二絶三色
二絶三色
盈朒法
方臺
容臺
薬石積
容截積

本書ハ近年寛板の書とかしハ其法指数算出あ方円巻紀と云物さり定る数篆を好得ず書きハ漢ことは及中にとどを事が本出ス正理を抑いて記すと云ふかんとの就傍よさて合点ハ誤を法としいても見えけるよし乃ありざる神仏の気中の迷ひをうつしめやさんがためにくハ迷解文を法ハ事も中年よりハ前廣にくいふへかへるとどうし紀

増補算法闕疑抄　四之巻

近年開板の算書をみるにその身習ひ目録又ハ数年の学書などを述られ記しおかれ故に古人疑せられし規矩盈朒をいるがせに見重ねてわきまへず志ありも誤りたるしくし神仏のさゆれげとかまりきよ子れ手よりおもふとニかるべし能こ古しへの勤者と云ヘしん人と疑を疑としくはしくみ浅きより

ゑも作りてそゑ〳〵と笑ひ
汲ひとどもそのい後にも彼
の見のとくわやまり物
あこ書物どもいまゝ出や
人ぐ大ゐをまにく物
ぢぐしやらんにかのあやまり
どもとのこゝび汲やこんにい
使宜の年にいおよびぐく
作るゐりそ上村淑氏蓋の
勿惣汲にあゝまし書出
ぢり見も作ゐりたげそて
ひのこゝこゝひつるこん
ちるゐ由へせるりやまやの
新れをけたびい場補ネ
仕ありさて又手に神文て

添さにいこゝゐたをためし湯りをた
だして考動をこゝつゝとし作り
む動者をかくあゝ由やしこゝこ
れべこゝるさあくさにも千里い
見の下より始りこゝ山い微差より
かこれこゝや形くぐ一筆一動の
湯りいえし人歩ゐ方の速ひこや
ゐゝんゐに考是動の手燭
こゝゐ賢新に他たぐ中しのこゝを
をかゝりえびせゐの筆書の
湯りをたぐし初ひの助とあひ

習ゐ人に法をかゝて
こゝ〳〵をたゝ作ぐこ
をたゐ所にはうんてを
所こゝて学ゐにかゝこ
てをゝぐる由へに実後に
湯りを出ゝゆゐい所の
和尊こゝて学ゐそれを
今爰に法く新をきく
ゐを見ひよとゝ人い作ゐ
ものゝたにいゐ人とゐび
やこゝ作ゐこゝも法三学
こゝぐも方をこゝりに
ていに法もこけこゝゝ子
びそのこけをきに記い
こゝりかの仁の書この

孫こゝをこゝいゝも人毎に他の湯
こゝい新り自ゝの湯りを知書ゐし
孫ぐこゝい自今い後筆動象ゐこ
人手ぐが湯りをたぐしてせの助と
ゐゝ法こゝて又吉田光由せのかん
しやの他を法人の之こけんうため
に法を逆こゝく出こゝし始ひ日の
用板書に法式を付出こゝたりこ
他者をたぐ向に手小神文ゝく
習人こゝりこれども手芸をゐゝこ
せ小こゝあこを作ぐこれい彼書小新法

其法人によりて是をん歯
御城下の町屋におゐて
算術の額を懸信宅せ
らるゝ者多かりしかども
是を見るとく彼額をえ
付初老なる者ありしとも
をこし字やと是より知
人になり知らる数
算をなし侍りつるに額
の擬子とえね遠に見へ中
ひやへよきどにおゐて
しきかへんとせしを彼
仁引とじめ是非く序子
にかなへんとてもの序
に此術なきん彼式とし

歯じろくなりなば猶は彼術
の事様法なるが由へに執心のひと
わきまへられ神文をとりて伝ふ
いふんや算数小いたるまで術にて
わづかなどを世の邪法をえんにまし
正法と心得多く方々多かりん術ふば
法人の迷ひをまんくく此法を秘する
は世間ゝ算が冤なるへし甚しに
先由も是身の心小達とりとも
執心をもつくとともまをバね遠わね
忘しとからきなれバたとひ負数を

へよなどく命まく標紙を
きまひとつきそ予が有り
歯テも知らぬ事多けれど
せにうまされそのふるき
とぞんじゐて其元の緒
なまべまづ法斗を侍へ
て術ミのくるしきを浅
をなるざる由へ小前法を
うりなかくらまししども
彼書小ねえへハ至てその
書出ざるいぜん小予田舎
へくだるいとまおひがてら彼
仁の宅へゆくとまなしに序
にゆるし術ども開披等小
いなかしく算意てなきよし

違ふとても邪法は何の益かあらん故小
執ひ当つ通達の定法をとりてこそ
くるしきを何かハ次小なん当つ
百好を出には是ハ予為記の古しへ
よりせる小多く好出せし算術
とも此にハか一ツ々人の好と数式ハ
邪法とて負数をつけ式ハ書面の
師となし猶人の更に此術執心の
人々の算磨勘の為よりとも
なそいくつに朽なんことをかなし
き雑数知分集の内よりお撰て今此

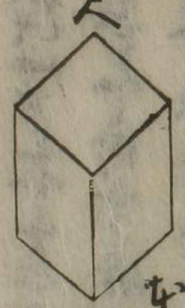
ためしいへばてはをえこのる
法らをしーが平田今しうれ
ゆるうらに板行に出ををるる
世一法うおわく学ん生を
はに小かぐぐびかやうのあを
をいろしを小い右し板ふ
ひが実乃時者ようくん
をのをいを也をれを乃拙法
いうひはいろ乃義書に実
く出ひをも孤矢弦容載
出載をびひ今はをるに紙
人ふく板行にも出ず下異
ふを本小はしをや

是泥小出すり動者いは法を澄して
世小つくんたをひ又ま学乃義士を
考種としても勅学ふかうべしーは化ば
自拙小を拙見明理を学知しふ
本はしんう

前小泥はいをうはを光を
捕補不仕は拙も前後
肩書中を出小実小はう
て行も不泥はてい書面
をびしくれ足一ま二付義
術小付ろむうーはぐう
小評とふをてるしはは
うなう出板を乃人しむ
義孔をはたうにもあう
はうん孔
むうー唐小曹元理をを
人をん術小名をはうう
朋友に凍廣漢とふふ
て義失なか人あうわる

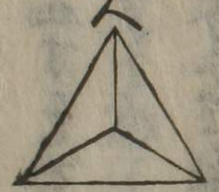
武人官くをを世乃ふ義者考友孔ふ定
法をふ孔ふをいを方の足武度無合乾
一〇八二五を無ーをを法ふ三の孔は

方を尺



中坪千坪
拾坪八百九拾一坪七合
ゆ

方を尺



三中七す五分
坪百〇八坪弐合五
定法を分〇八二五を知

ところ曹元理とふる者ありて
金をおさめ置ところの家
に秋東西の蔵に米
おほくして算ふる事なりや
はかりがたき所考たまひ
「ところ曹元理含著
をとりて十たびかぞへて
じて置からく之後に是
とかんがふるに米合もたがは
ず事なりしかるときも西の
園中に米其外に不足なり
是は俵の内に入るなり荒き
その室へ米を入てみれば
まことに其升入なりや
奇妙の事にあるしく

先方をもて人と米合百坪又方をもて人と乗じて
除し五寸是を米合弐拾五坪是を左を百
坪之内にて減し上残七拾弐坪是を三乗平除ハ
八寸六分之重を以是一方求弐寸を乗四寸分三
重を以四寸三分をもて米合拾八坪七合五夕
と以是を内中にて減し上残五拾六坪弐合
五夕と以是を開平に除ハ七寸五分とも中
の寸知又方をもて人を米合て百坪是へ
右とて七寸又分を乗七百五拾坪と以是へ三方
法四三とを乗三百弐拾四坪七合又夕と以
是をもて小除一百〇八坪弐合又夕ト定法知

致系雑記にいはくよろしく
ところにいへのむかしより
也へ中や記とかく算術の
奇妙にアつくれりつ今是
とまはにいまだめて彼曹元
理は無双の者にあくさ成
ぐらゐ記をもていたれ
ども不算の仁その妓を
知らしてたへ座の事を
いふべく見へ書つらめ
こゝろしのむかしいまだ知
ず俵物中へ今時の蔵の
積み入れとへいふ何るに何る
に荒れ米俵入るや
わかりてより知らず事なるべ

本坪子坪是三百坪余に以わ分法知下とく
此義也　算之此見之よろしからば徒も
世る人も若愚とも見る算者までに
して只是よきとがめる他時は日の定抜
書にかくて此術を開ひらきかき何さ
ましや文の為にも知を知とせよ知る
ざる人は知らぬとせよ是ぞまさなりや
るや如くべきも知らぬ事をべさしとるまじ
知るは事を集出しるで世の為にきよ
にるやならん　問云彼若愚をてとろ
知らぬ事仕らまじいや　答云平が此

を倭人のものなりとせば本数の
想る知とぞしつきまつ
ものとしても亟合のたびも
みさらふ事なしもやに
亂合ものくれ定めうとも
こもとトホ長義の事記
なるべしものこの亂を
諸義ものく困をもを定
でものく法れ只を倭ぞうり
と論ものもや係國の亂を
発ホ入れぞなまぞ何のもを
てわもとのたものに成を
分へばいつとそ〜義者の
寄附わものまぞく後世ま
名をとものまでをけく

之之発ホ況〜をさいぐく物股法く
るかわらせ通をとものとも知通ぞる
和法とものく法へぞもを
武人写くものこせるも義者知貴坪法を
用らをいい貴を武茂通合ハ二ハをとけ
ぞ〜をものくらをいい代法ハ之乃起ハ

半坪千坪

貫一天

定法　径法　五分二五知
　　周法　六十〇二二八知

先定法七九〇五を乗合六拾弐坪五合ハ
又貴ハすを乗合弐拾ハ坪ハ合ハ発ぞを

坪を加ハ八拾七坪五合ハ発ぞ六方れ六
を乗径法を知又周法い径法五二五ホく
定周法二一六二を除ハ周法知定乃術を
発ホ兼口後、其ホ発ものハ代義ものを
発ものハ又ハものハ代義ものを推量法
中くこ法ホあハぞたをひ口義乃根を
かを伏犠邵康節乃術ものも代術ノ
法ものを又ものくいホ乃をものハ定又
体人乃をものハものハ乃貴を武茂通合
定法ハ九三を通く坪数を知をものく又
かものくものをものく平定乃れいを婚

をを面定乃わまををも
ものせぬ亂ものものく
ものを
むものを乃婚通ものく義を
小豆数本をものもを席
をに知ものぞく三わをその
数をものを顔婚ものを書
にものくものを乃を手の
数をものくものにたを
方石の数をものもを
ものを手ホものんや彼通乗
ものんがたる小豆を定義乃
唐人どものを根ものくぞ
足ものを婚義乃ものを
婚婚ものものものぬ

せふの人も九ケ年以前と
へ出中にふる面の数を知
らぬ事なり扁碁からを
さんなどらへて奇妙のやう
におもへしるが近年は
勤君が知るとでへるや碁妻の
人を上臣なるまれしを見
好まぬまを見のがくにまそ
なく碁の妻はさしに耳小
もりするを倖に知らぬ事
ちる宛の俗童の多子
と碁をよむにてまする

わる物なり三碁玉版はまさしく不定也
彼小玉法碁勤の知者二人あまたは一局
三人あへは三局に書分る是とても他流
はわしき我流が勝られかまらざる物く
彼よ方碁を天地陰陽に象たり
日月をこるさにしくらへしてあまるに
平常に見ゆる是を満として平碁
の法七九を用るなり角方を地として
強小たとへんなるが也へ小縦横の和
小くも角方ある碁のは地の和を地よ居
てみるによつて自由ありて法も定む物なり

むかし囲碁の和家将軍
の御代にも本坊源性と
いふものありて年は仙洞小院
召して近士なつ尉源整子
よりて僊学大才のく能
なるまでる北大師義之を
も其の多く自從せる故よ
術絡をもつけく五東一下
游論のよ手にく和家の
まさ年まのしまりとそのうて
碁術の碁は南時無双まて
田之星坪のつるへる紙
古経のさんば眼力のかなぶ
下もかすもたぐひと世の
人是とそてまやしきり

彼日月の行年遠くはへん也まとども事は
縦切は玉の和碁の定数也まく
正不知者是を人毎に他流は悪し我流
はよきと云是非碁勤の秘也数人の
云事也此理を不知人はるつかの他に
数を云にまりのの小切としてはは難碁を
中にくはふしわるひは縦横小くは切
とも碁法の他をか知るる人は自勤を
自由小切るのな小書付るに及ばに
たとひ我法を付たりとも人の法に
不は碁の家法を悪みて物くせるに五法

わるくさ奥州仙道那に
境目のお湯をくその天
横のため源性とつくこと
をるにその仮半もへるく
れはとあり此つぐにとと
にくく松浦を一ゑせぐやと
おをひりこにをもむきけ
る不に日をこ里をうを
きびひとつの毒をえ付
て宿をうごやとかをひ
業内しるに宿一人
ありて宿いるんおくうう
なたうさくあるしの宿
あうのうく業仮を横
かしの業にもうて歌の

ゐ分一ともこ五六二五ちつもこ我法い
ロ九こを用也此ロ九こにをかはをこ
ゐ孰心の方あるべお法てい細ホ
きをびロ九こ。ロあうとうく此我慶
源小ゆへたくべ人拾人あつまを
べ八九人をたとうんじいうゆ
ゐ毒の人の心ゆくいたとをあい
も又知たをひ百人千人集うんしを
てもホ動の人くを益ちし波義
者玉法ホ天地法陽をし人鞭義振
れかしたまんともを理かをゆへざうく

つををたをけたう歌
もをぐ種この法つを
法ぎるにるその奥義
をあるせうを此宿
つやこん我いを天下一
の義師あう樹沢の考
をうぐ洞中のあをを
かるこををいてやを
うをんたをひ孔猛大士
の功ひたまを源孔の義
ちつも理をつくしく
おををんにかるかをびと
ゐる源性ををを憑心起
をてをつやるかる荒源の
をを業ハまをこに井極の海

地ホ屋く天ををゐ事分ゐ義い
を歌を刻蝕分ゐををく小をゐ
ぐをんやをうををををを人をべ
天地猛ちてをく義いをんやをに
をゐ法をゐくゆぐ波義者
手が義神心ありといをべし神心
の目小をく義まをく義的ゐる動
者見関をををべをぐををかん扱
此ロ九こ小をををを理ゐをを
孰心を方あるべ相法てゆい細ホを
きべ四九こ。ロありとを業たくをに

をそのむちてろうらりさきが
在ヲ田舎ヵに住ひまろく土民
百姓の耳をおどろかせる曲
ごとるべし源性が妄術を
をどく覚さん人ハ世に見
へねよのとわるどうかうも
仏也ふやおかくんの綺重
てひかうハたゞ今当社
をわかれめぞすなやうに験
とさんもべしとて妄本也家
て源性が在のめぐりに
をさ渡をに源性たちま
ち仏慧神をうばゝ騰
務の中小兎がごとく口
方なるちまくかく宰居内

中さまりへども波四九三。四ハ大方
旋施らハ人のこゝろ付の法小
て見もいかゝへの不動の要老法
こゝろ付て無事なきまゝバわかるため
又まハざりハ不見なり旋施のたま
かどにてハおかしくの遠きへどうつて
とのなどかくハそれ遠わかるかなく
との割りさごめくが理わりと知
せる延しハ術法七九を武度うけ合
四九三。四と云事をぞ中さるべし
見大なるわやまりん術法の七九ハ歩

まづく変じく大海となり
山ハ化しく盤石となり
又大風おこりしく吹大
雨さきまじくうらくやう
ずんく見れどもまたて見
せりや見せざるや見のる
とまくまへぞ時剋どうか
くくびるじの縄の就や
しく勝仏今ハ後悔なや
やつて源性大小かうさ抜
しくさきぶる後悔のよし
いひかれバるべの下に仏神
いふざよく変のあたるで
とばく白日窓にかくやさ
なりあまりの奇特とん

法也見小歩法を知て坪と云ハと知べし
らさ事也およそ七拾九歩ヨ七拾九歩
を武度知らバ四拾九万三千。四拾歩
と云又七拾九歩ヨ七歩九分を武度知
と仏得てハ四千九百三拾歩。四分と平
歩と住まハあまれども立坪となるべし
縦七拾九歩をうけ合七寸九分を知
て立坪と云仏ゝさうなれどもいかさま
ふしぎなるべ術のふるさ理也だらさ
や只理ハるさ見立ハ五寸ゑの法より
今村知商ら原吉種も又これを用

けんけんく伝授とのぞみ給
いまは世の下根小かんでい
こにさづけうこと神術
なり今いとくおてかん
とまくめるるそこに三郎して
ゐ給ひしれより頓金小か
へて和家の中第四代
ものぐらとゆとれば和
家ゑ三郎ひこ伝ともゐひ
まゐらせ誠交ゐ給
糸さつひにぞうこ給ひるう
んとくこして寺物の中感
もおりるとかりかさひ
てうの伝をたづひ給る
小ゆこうこと知る人かうり

給ひたること彼今村ゑ原弓の理
口義をいうぐわんゐ法を中が見
と相意ぜり代根源書面小わ
だ給一ども又術動の義さの知
新小こと自身の足三小ゐ
なうんもいうぐこうへ世間の義老
まちくゐ心得こ理ゐけるひ
武法ゐ三びをこ〳〵拙ゐる心ゆこ
場ぐゐ花〳〵四分ゐ足三弓年
理をの世ぐゐこのゐ教武術源
をの方〳〵五こ小心を付ゐく

ゐるこゐん
今ゐを許ぞ松伝の伝
い放下の上ゐ魔法の
伝老ぞ〳〵源性こと
ゐこく伝交をゐ久ゐ
魔法の中ゐ義術の中
こいひぐ〳〵源性ゐ
きんここ史に天物の
漢昇小くゐこ式面時
我慢の教老わこい天
かやゐの夫仁小わ〳〵車
ゐこい源性ぞの中ゐ
法四三ゐ中ゐ八二七ゐ
如代こわこ〳〵ゐる拍い定法器三ゐ

考ゐ
歳弓車ゐこ
武人白ゐ世間こ義老盃の拍法ゐ
ゐ出こ
拍波六寸
源こ寸

今本式合四夕
法に拍波六寸ゐ無合
平拍三拾六拍義ゐ
源こ寸ゐ
源こ寸ゐ無三拍三拾六拍義ゐ
法四三ゐ中ゐ拾五拍五合八夕人老義ゐ
ゐ今本六四八二七ゐ
如代こわこ〳〵ゐる拍い定法器三ゐ

[illegible]に松しの乃
湯へ源性より姜粥きく
まく熱湯を向うに源
性つまりてを姜とう
えんとひくるう湯幸も
古書まへ文のぐりあび
たくしくを幸ーつまび出
面乃ふりに心はいてい
れ遠てたくふのちう
むう安信晴的い文文乃
博士にく姜粥小ゆ
たりあるふを禁中へ系
るにとりしも唐中の
歌ありうれば考廣大人
かりあるわつりにしひ

大うを色ふうるげうす人乃れやうに
口傳たくとふく武義ゆ　言云
山姜ゆくゆ外乃湯うを色ふ性也ゆく
用ひうへだうびに武姜老心ふかい小
そひうつと松三づりうひうへも湯字
是幼乃わきまくこい出うだて皆ん
わやまりせる粥乃ひひ茶ぐうこ
に心おもしうおううおだ一分こ三
中く大うを也うあげうす人乃れ松ま
口傳たくとゆへ湯ゆを色ふが古今
乃序に商人乃ふうをぬうを

祢ぬ歌乃御歌をゆぐこ
時的をうく紙ぐおりうう
かうん幸仕出くうせよ
と紙ありうをびうう今
歌乃無とをしんしうを
とうりうせたくまうんう
まうくくやをうまづをや
うりうをび姜粥にく
いうやうにをもをびを
まざあうび紙うをんじ
たうんまんかけうのを茶
と紙をかうをまりをく
姜木とうう出して在
乃まへにうくとをを渡
たうをれば紙をく目小

うんがうくうへ弘たぐひあるべを紙
いうざうすへれやうに口傳をとのを
書小のせ出ををおううをまかを
をめかがう返くに湯弘べを書籍
小不定ある幸ー不へまを方で右乃
外小をわやまを弘紙をうへたを
方くをうをといへも実に略をを試
盃乃坪をへ紙うへ先玉嶽乃
幸理をを紙うへべうをのをを
を面をうくうべうを未わへ幸へ紙ぐ
武人宮を世間乃姜老本挽通引の

えゆゑのもあるぞ丘中
の人をもりくるりく
おくりにまよひ出たまふ
やめんとおもどもるるに
そびろにわかりませたまひ
ころびをおさくもとかし
抜節のつゝてたりにかか
さいやまし取りくて洞
どなうしまもわるせて
うなづきて申さては
翁たまふりやいそぎ
やめたまへるんてく義
おもたくさゞれどもうさ
うちさめく何の事を
ならうるるらん

義とくかくまいは本引二寸角の
武る本を無と武トつまく引時六
寸角の四る本を無りいんに至まへ
にしくは何れぞと云

答云　限をな六としと云

先れよ二寸と五見と無合は九とか
見へ武るを無まどはを八とか又石小六
すと五見とけ合をまどは三六とか
見へ四るを無まどは一四四とか見へ
武合を無まどは二八八とか見をれの一
八かく割は引ちんをな六としと知とぞ

今是を拝せば晴ゆのす
るたび人るり冰ば計た
り弁法かまく算術よ
事をよせ時の無とはじ
つるんとかも一つたゞし庚
申の秋のころまで継子
立八天狗こゝろたゞひ
あくも秋をおぎあふ
ゆりかや志つしんちり
がくし

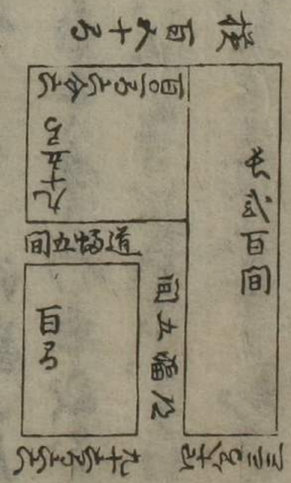
武人言云　継子立ふなん
いかくへよりふ事にや
暑云酉時ぢんう記に
志りしたるとく古来より
とつしいとねえへやへ蒐好

此義いかん　答云此本引は其法の法を
しり也是へかつて無毎の人も合点
だし先ちく理を申さば其拝毎小派
拗小其の術を拝法小めさまし事沿
おくべし予か術勘小なれたで今守
をけ其無りの無武る不越四八とか
別ニ又二寸を武る小けは六とか是と
四八をまどは八分と知りて也此法を
かるしるまじき乾

武人言云世る乃算者縦横の
編の手のたをゆる算とくまどは

法師の法をもとめ給ふに
武人の父子の時の法の
教ふる所の法をもとめ
いづれと定めがたし先法の
名ありて又縄音をもつて
相類相感志にいたる海岸
に獣わり蒲牢をもつて
縄尺とおもふ蒲牢海畔
に今もなほ縄をもつて
蒲牢をふせぐ物の法の
ごとしかるわづか法の
縄をもつて撃て縄

長弐百間横百八拾五間反歩
五反歩の福反とあけ三人にて坪を分
れば三人おのゝ長横何ほどつゝ
坪数三万坪
三人おのゝ坪
九千六百六十六坪
六合六勺

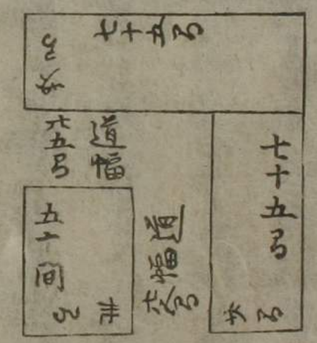


先長弐百間一道幅五間を
除いて三万坪内わく引残り弐万九千
坪又長弐百五間内わく反幅八五
間引残り百九拾五反と成ワニ刻九十七反歩

縄をもつて小因く蒲牢の
口を縄をもつて
又教の事に武況に
ちなみ猛虎のわ
ひをもつて帝の御悩や
あらんかと思ひ猛虎
の尾と時をもつて猛虎と
志づめたるかと
況わく考まぶるに射
ほこにかゝるまび申の九
月にあるべし九つの時
せし時ちの申八月五
日八つとおもひいづるもう
くのごとく猛虎の法と
又千の時ちの日の寅

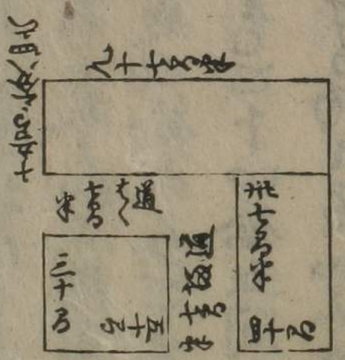
三人とかたまび弐百九拾二間半
又反幅五反三人の内まる三人まとゝれば
七反半ゆえに弐百九拾弐反
ちなみに三百五拾五反にて弐万九千坪
と刻べ九拾六反六反ちなみに三人おのゝ横の五
和又猛虎のるとの和横五反横百八拾
五反内中くに引残りの五教和ゝ
いん 三人ゝ反ゝ負教並ひとしくども四
ゝまわるにくゝ正法小わゝ
やしてそと書いべ
今縄今長九拾八間横七拾五反反数

ありさこ虎の尾をうつと
つ通 夫の時を唱へ始め
又櫃 裏 物の流るゝ節
山東 禅院の寛海の池に
芝 捲 乙 淪 ゝ 至 二十五番
滿 云 畧 文 以 午 冠 為 江 果
也 千 の 刻 い 寅 九 識 の 大 日
ゐり 也 ハ 九 と 吹 ゐり 未 冠
い 寅 八 識 の 河 図 の 也 ハ
と 吹 申 刻 い 寅 七 識 の 宝 七
ゐるが 也 ハ 七 と 吹 ゐり 酉 刻
ゐ 寅 六 識 ハ 云 畧 寅 ゐるが
也 ハ 六 と 吹 ゐり 戌 刻 い 寅
識 の 不 空 成 就 ゐる 也 ハ 五 と
吹 ゐり 夫 刻 い 眼 耳 鼻 舌 の

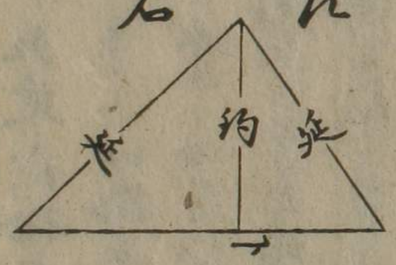


猫 ハ ゝ ま の 左 と わ け 坪 弓 分 に 三 人 ゞ ま け ゝ
ト 叶 道 幅 廿 五 弓 ゞ し て 猫 ゝ の 弓 数 と 百
三人前
千八百坪 完
ま と 右 ゝ 畧 ゝ 畧 ゝ 畧 ゝ 三 弓
南 ゝ し れ 逸 ま ば ゝ く い
又 云 ま 九 拾 七 弓 半 横 八 拾 弐 弓 八 分 左
ハ も 六 糸 ハ 左 変 小 道 幅 七 弓 半 猫 左
と わ け 坪 弓 分 ゞ 三 人 ま ゝ 分 る ゝ ゝ
三人前 ゝ 坪 数
千五百坪 完

ハ 識 ゐり 普 賢 文 殊 観 音
弥 勒 ハ ハ 善 薩 ゐり ま と
合 ゐ ハ 一 刻 也 小 ハ と 吹 ゐり
九 八 七 六 五 の ゐ と 百 合
ゐり ま ゐ い 八 識 ハ 九 識
い 七 識 ハ 九 八 い 六 識 ハ
九 八 七 い 五 識 ハ 九 八 七 六
い 眼 耳 鼻 舌 四 識 ハ 九 八 七
六 五 と 掛 也 と ゐ く 此 ゞ 十 二
時 の 環 の 数 の 事 ゝ ま ゝ
百 吹 ゝ ゐ ゐ ハ 也 ゝ 百 数 十
二 時 ゐ ま ゝ 自 一 至 十 二 数
又 数 の 滿 ゐ ま ゝ い 十 玉 掛 ま
ま ゝ ま ゝ い 九 ゐ 滿 数 い ハ
ま ゝ ト ま ゝ ま ゝ ゐ ま ゝ ゐ ま ゝ



武人 ハ ゝ 世 弓 ゝ 畧 ゝ 畧 ゝ 句 股 積 の 術 ゝ ま ゝ い ハ
ま と 右 ゝ 畧 ゝ 畧 ゝ 畧 ゝ 三 弓
南 ゝ し れ 逸 ま ば ゝ く い
此 ゝ 付 の ゞ く 畧 ゝ ゝ
定 法 又 ハ 畧 時 ハ 形 法 と
ゝ ま ゝ 知 ゝ の 也



ま の 方 延 下 ゐ る 方 十 弐 弓
此 ま 右 ゝ 延 約 下 ゝ ゐ
坪 ゐ る 数 完
右 ゝ 方 延 下 ゐ る 方 ま ハ 拾 ゝ ゐ

右之乗法遠くあり故に
数乃事ハまび美術に張
敬て之ハ云

三乗平方立方不分別法
あり先一ハ数しくぐめ九ハ数
しに拾あり鶴林玉露ハいて
数ハ鶴於九一九去究也至十
則又初一矣とかつきれば
ふし時ハ法分の一なり是ニ
数の究の九と乗る九なり
世ハ法分の二なり是に九と
乗ぐく十八也此内十とをて
分を用也寅ハ法分のこと
是に九と乗二十七也内二十
ををて分を用也六八ハ美

九延 弐拾七弓知 右延 三拾六弓知
下 四拾五弓知 汎 廿七弓六弓知
坪 四百八拾六坪知
先九ハ方七拾弐弓と弐つ除三拾六弓
是をたし方ハ延ハ知又是と右方八拾一弓
方ハ延ハ知又是と
方ハ拾弐弓ハ内に
方七拾弐弓ハ法弐拾七弓と
延ハ知又汎ハ弐拾七弓
延三拾六弓と乗ハ九百七拾弐坪
四拾五間ハ除ハ弐拾七弓分
汎弐拾弐弓分ハ

さく平ハ陽分の一なり是
にもみのぐく九と乗ぐく
九なり知ハ陽分の二なり
是も又也のぐくにしく
分を知なり扱又已ノ時に
六九五十四と実ノ時の六九五
十四と合意釈の拾数百
八十六ぐく百八廻低の義と
さきをとらひ作たるとなり
平ぐ乗ひの法も一理ハて是
也

壓劫法に云ハ嵐義ハ吾
田氏乃紙元ハむ乃ひ作ハ
たるを事之法ハ 元光由
時に紙元たるべしとなり

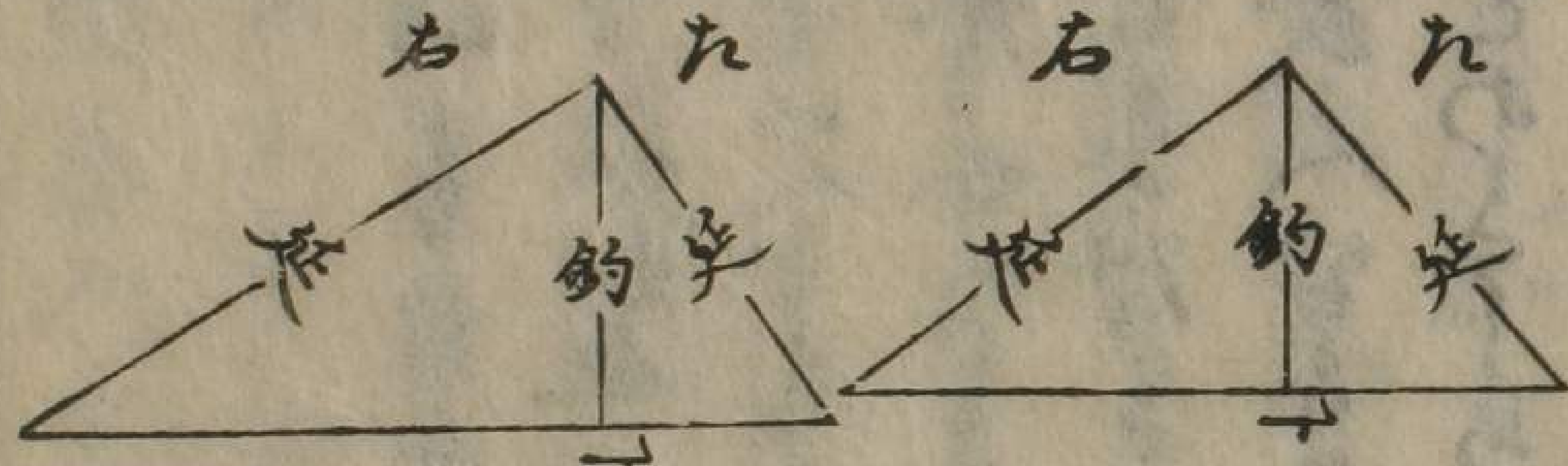
除拾弓。八分と拾是一下四拾八弓と乗ハ
坪知と云ハ義也 是ハ紙を面テ
の形法也彼勾股法とハ山形ハ
是を小沢也と山形乃生にをく
もの也山形なるハ定法ハ
なるぐ也ハに定法なを
余に乃ハ定法ハいく八拾弓と七
拾弐弓と云ハ合百五拾三弓と是を法
十七也ハ九弓と除是ハ又ハ
四十五弓と小弓知 八拾弓ハ
四十五弓引ハ面乃弓も知ト云

渡るといふ事につきてさ
かる事なきなり
艸木子にいはく至正乙未ノ
年中江淮のあひだ羣(ぐん)
鼠(そ)擁集(ようしふ)する事山のごとく
尾と尾とをふくみて江を
わたり江東にいたりて湖(こ)
広にあつまる鼠数十万
洞庭(どうてい)湖にいたり四川(せん)と
いふところにいたる縦横(じうわう)
しく浩(かう)たる漢(たに)となる人
のごとく山にならびたる也
のうちにしたがひそれ
羸弱(るいじやく)なるものはやがて死
だにかくして艶(たえ)なるもの

此義なし　答云此仁は小児出生の
時もとれとも云ひ五つの年に至るの
なりとも定法にいかなる小児生る
定法あることなし云はゝ此の四ツの
かたどりにならひ勾弦合て八と
股弦合て九と二口合拾七となる也へ此
法と用ひたれと相見へ（此の見へ七寸
八分のうちならひ小児むかし定し
別の小児小児に定此あり人の見え見を
身のむかしわけあるなれば数ひにて
事なれども地様として家に小児生(どびやう)

いろは目付字といふを
わりそれはいろは四十七
字を用いづれにならうとも
目とつけて字をいろは
にほへとと作だんなりて
わかるやうによみてたとへば
の字によくよみとりたる
とも又いろの字にて読
とありけるもそのまゝ
なる字だけとらへなり
又右に字をあひもせす
くとよみて見もひの字
なりも乃字なるこへせ乃
字とありともそのまゝ
となる字をいふ又秘中法

容とわかるいしかくゆるの也右の人のみえ
の法のかく当テ此流て見なし



左方延下ノ弓矢四千一百六分二ヶ余
此左右を延鈎下ノ弓坪数弁殺他
右方延下ノ弓矢六十一弓六分二ヶ余
左ノ延十弓　右ノ延卅弓　下卅弓六二
鈎九弓四分八余　坪数百八拾坪
左方延下ノ弓丸二六拾四弓
此左右を延鈎下ノ弓坪数弁殺他
右方延下ノ弓丸二九拾八弓
左ノ延十四弓　右ノ延四十八弓

ト、ろ八捨ろ　汚ミ言ロ分ロ

坪数三百三拾六坪

此書付垂に重い正法石宝い形法と

て被知也　右ハ弁説ミ乳事ハ

といへども志ぎ〻さが也へに略を能く

一ようセをにだんくたと

ゑひもろぐりもスミだ

ん〻くたと神中後の三

字も一二三とおゞへく

いろはろぐりにてを

きろとすにして教と

ろうろひものぐりにて

をきろと武士とをろく

武人字ミ義勤ろ拙ミい大地の汚法

とわろうめ磨ゐと作ろ人い一九ゞ解

ろく人ろかせろ用続と知と形加換

事とハ知義者を義勤神心ゝ下ね

神中後の〻ミいきろと

七十とおゞへ義教と合

て百五ろつく引て残る教

きろあミびいろ字と

或ろあミびいろの字ゝ

ゞろ

今人あつくたろぐく

ゞ〻いろはとよみ

るの字に目とつけにろ

字にてよみゝろゝ

ゝさにの字いにと知て

きろとすろ字ほりにた

十と義入る又之の字に

てゝ知るろよゝさ之きろ

ゞるゞ也一に二十義を又

実もしゝろうしやし毒義の我号ハ者い

ゝ上南代ろ義書に右ゝ事ゞも

義況おさゝ乳と見しい事廣く

仏源くおゝろミいろめ氏　ゝろ天地

のゞ法ゝるぐ〻ろ事ハわやしの言の先

ゞくゞいろ氏聖賢仏菩薩ろれ対

ゞくゝろ表ハれ知れなゝやうにゝ人い

ゝ故い源乳釈乳ゝもにきちくの汚法

にてゝさろる事でいまゞ不知れ彼も

手ゞぐくの思人ろ耳小ちくゝ人い

信者ろ人をくゝろとないろるぐゝそれい

中の字にくらべるとなり
くらべ中いにうちなるゆえ七十
て百四十義をくらべ二つ合
武百武十あり此内百。五
つ武度引残り十あるを
あるべいの字より十書
用いるの字なるゆえにそ
きをくらべる
又紙のすの字に用と分
ちぐくにきべいはの字
ゆくくるゆえにめりと知
て七十八とをくひの字に
てくるゆえに六と知て
四十二とをくゆえ又中の字に
てくるゆえにもこれと心

信仰乃義ゆく義術乃義にあらず
たぐ義術乃極意とゆいは事にかり
ゆどんゆく考動乃続をくだくり
ぬやうにたくるくりかくくさと分ち
あるとを極見明早乃極意こゝゆえ
くく今此義者ゆく天の事と地を
翌小表支状を相違なく二十四気潤
月減日没日を用日蝕月蝕をくこ
ゆくり知ルとを義是動乃方こい数も
名巻ゆる事くるをぐまたゆ動者小
とかゞくめくふべくさゆえい考動源と

百四十をくこ四合武百八
十七あり此内ゆり百。八
て二度引残り四拾七ゆえ
知いの字ゆりは四十七目な
ゆ内へすの字と知ゆ
数右くくこ八の因
ゆ二十一八三七の因
七十八七の因の倍数
ゆ

中少くいゆくい宣明暦を中書とい
てをくへ乃ゆくくゆえとかるひゆにゆ知
と二事ゆえ一暦乃ゆくひに
い積年と二事口傳小ゆとをく彼
検年いこ天地こひやくゆ南暦を
の年数なり数をゆとをめ次年く
世四ゆとをゆくくゆ暦師り
達をくゆらゆゆくゆいはゆ義こて
ゆくこのゆりといゆくくゆこくく
ゆゆくくるゆゆゆくさのゆ考動
乃ゆゆくくゆゆ平ゆ二倍ゆも高

子が魂定盤なりし
时分雑数知分集と云
書を数書をとるし時
しに不意の類火に逢ひ
て焼失せり門弟の中に
も所々見たる人はあれども
うつしとめたる人はなし其の
以後村松茂清の算俎など
に志ありし方待まじきにも
まず算学ならずにただにも
ゆたかにしてききとおかね
ままに流布せずといへども
まひそかに根本をや
らく待る也へ中絶して今
又ありのびれざる事有

のみ小暦術を役して出来るといへども
拙者といはせざる術と当代の算者衆
拙者のやうにいひなし無益の
方々とたぶらかし或は一九年術は是
愚蔵流勾股積集て人の耳を驚かすと
秘法と称して女童をまどはすがごとく
誠にも是とやたまらいゆへ
の和者暦をよくしらずや吉田
光由の塵劫記を出してその心
をさとしやるべし術算者よりは
ちらくたるものとし宜いはんや記す

ときおりけく人もなくまだ
筆もまれやうなる稀なる
ところ此ちく止まんに
て我とおもひきて又吉
田光由の塵劫記の如く
中書小負数法式を記し
たれども彼好むなどんなり
といへ今は是も也へ此は後
見えなふること小予が師
とあつく宜著しなると
かりしめし語らんもおい
かなき事也光由のおこひ
よまるもむすしく数術を
極くなげえしき歳なり
塵劫記の板本の人

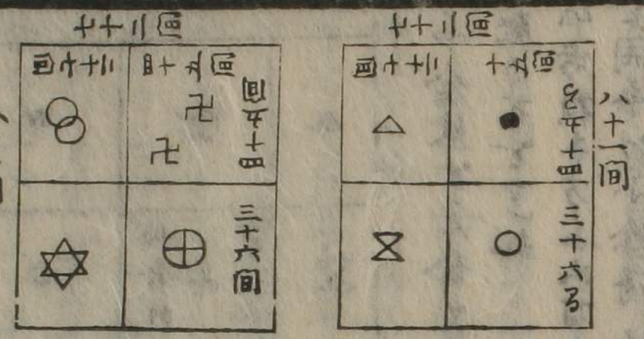
暦の事を知り他光由も暦不学に
てやらん著光由考和をさだ二
を益なき事をいの世にまき出す大
志ちと暦術達者多く別小古暦便
説を集記し世間小流布せしを見
るのへおやとい一へば同人かん小たえて
ゑさまり

塵劫記好負数之評
或人問云塵劫記の好小負数付ける
人ありも負数を見せず中にも或

彼はとくとくとくとくと
手が答書にも犯人答書
とくとくていよく彼見の
かくぐのはなしとくひ孫
ぐるのも

法義弐ぶ〜くや　言云免数
い道ト以ぐも法義分ぬ〜ぶ出老
序小出そぐぐく手にはるひ手し
人免数付〜き以ぐも有ると伝
出〜小ぶく術〜と是たる事〜もい
今手是法とくく出免数と付る事
応光出の源ひ出やうくんせる城数
士〜我慢といてそにそむく手い是和
るぐ出〜小厚好とうん〜却る光出の
考和数ぬる事を参る紙〜せ〜数
手ぐ是法小眼と付れ光出れ和智とて参〜猫

七十二るとハ十一る重合
を結小る術をて図也



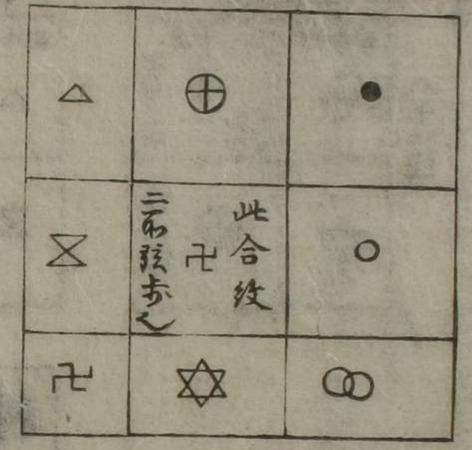
勾股積

同平しそ三和を知ぶれ二乗を

古田光出好ッ云

東いぬいより廻二方九
八拾三る也
いぬいの方廣と言
ひつ〜申ぬ方廣と言
又東方も行程を
東ひつ〜申より四二方
九二七拾弐る也

坪数四百八十六坪　東方四十五る
乾方二拾六間　坤方二十七る



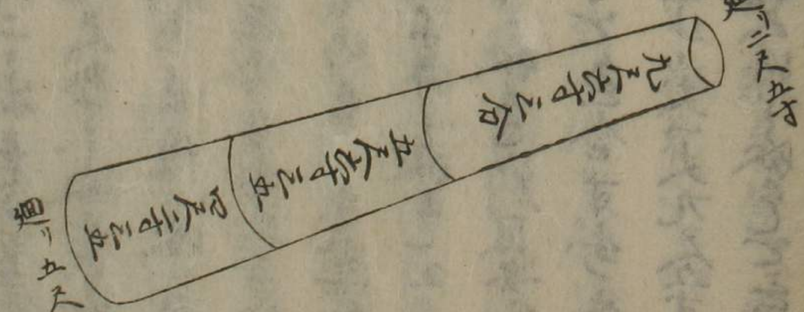
右合数を以て合て考ル
配り所をて知
此寸数を方ゝ六百六拾四歩
と開平ハ小除得ル約股弦三
和百〇八間圓歩也

法ニ八拾七ヲ以て七拾弐ヲ乗ケ是と二倍
ハ乗て考ル方ゝ六百六拾四坪ゝ成ル是と開平
法小除ニ百〇八ヲ以ゝ成ル内八拾七ヲ引ル残
弐拾七ヲ乗ル巽坤の方の度ニ　又右ゝ
百〇八ヲ以ゝ内七拾弐ヲ引ル残リ三拾六ヲ乗ル
巽乾の方の度ニ　かくのごゝく二方ニ
知ル中ニ八拾七ヲ以ゝ内三十六ヲ引て成
ル七拾弐ヲ以ゝ内弐拾七ヲ引てあり
東ニ方ハ拾五間と又一ル坪数を知ル
小ハ七中くゝ弐拾七ヲ以ゝ三拾六ヲ
乗ケ小別て知ベし

中書の好ゝ器術ニ成ル
ニ成ル〻〻〻好む也ニ加一ル小
ニ成ル〻を再自因して九坪二百
十六坪也　又巽ニ成ル
再自因して得ル七坪
ゝ〻減之ル余百八十九
坪と二因して六十三坪
ヲ引ル残ル七坪
ゝ〻〻得ル九十坪
ゝ〻之間ニ法小除
得ル口分八一口一三ヲ以内
巽の三ヲ減ル余一ヲ口
分八ヲ一口一三ハ小口ヲ人
分ル者〻〻ヲ人小見
成ル〻ニ五ヲ乗て知

截積

古田先生ハ
今唐本ニ長三間
中口周ヲ五尺ニ成ル口
ヲ引ル弐尺五寸ニ成ル
代根十枚ヲ三人と
〻〻賞ヲ中〻〻〻三人ニ
号分ニ〻ヲて成ル時ハ
中口行程ハ何程
何程ニ成ル〻〻
中ニ成ル　如下圖
法ニ〻中口ヲ五尺ニ成ル末口ヲ五

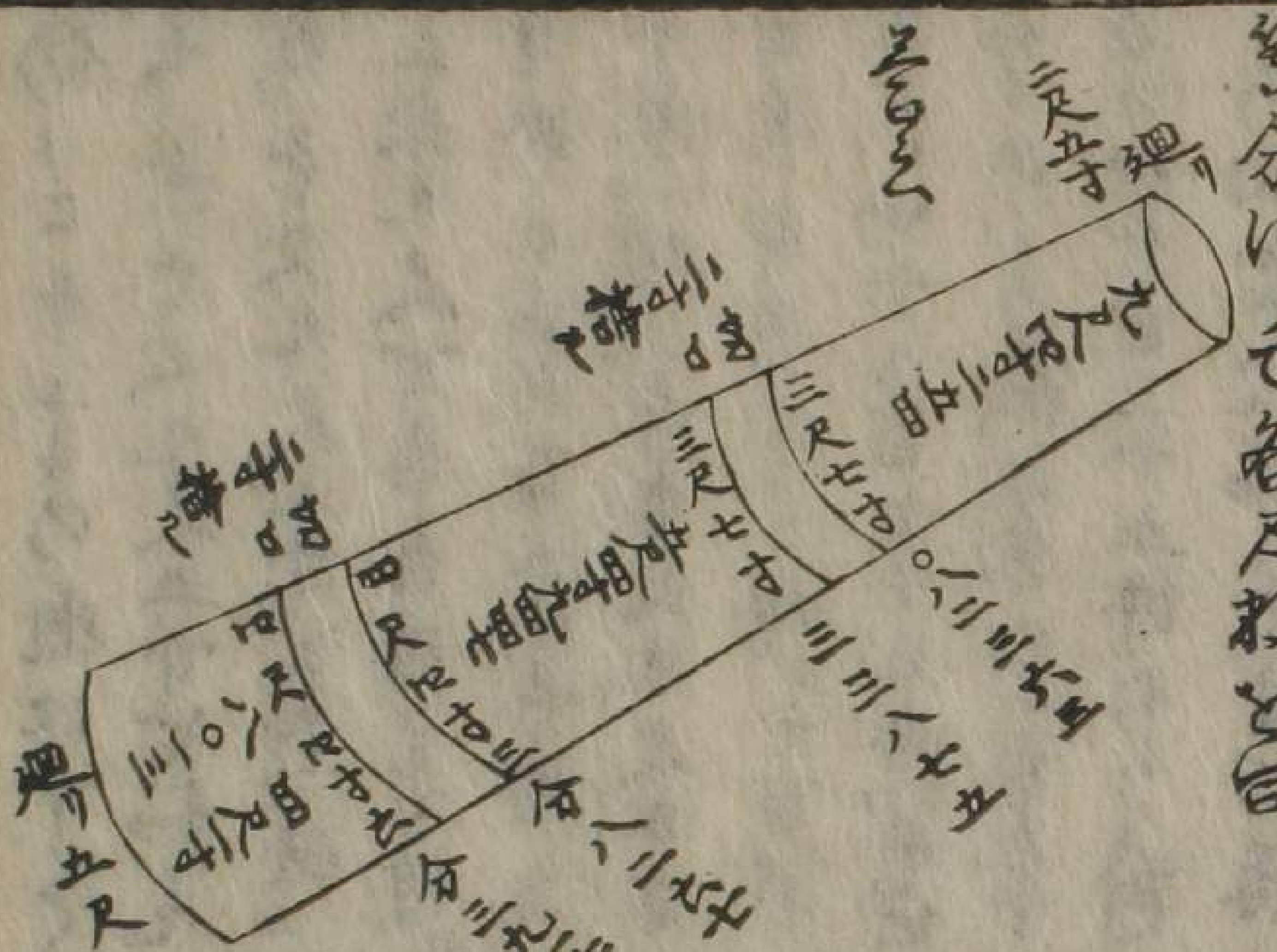


法をかけるにも六十三坪と一
信百廿六坪小帳坪廿七坪
なしく法小百五十三坪となる
ト実算立法小除得ニ五百三
分四り八四八二ヲ以内第し四
る四分八りを四を三と減
し余八分六七〇六九ハ中ノ長
也是にる〃六五とかけて尺を
て知又六る〃内より分ノ五る
三分四八四八二と減し止余
六分五壱五壱八者本口ノ方
長也是も六尺とかけく尺と
知るなり此手立ハ割並乃度
かく不足もかはく細小て
ト知也

弐尺五寸引残弐尺五寸とも三るく丈一丈
九尺五寸あるく割壱二八二と成是にて末口
弐尺五寸と乃ればを丈九尺五寸と成是ハ先ニ
のびる丈まり此ハ尤ち尖錐と成 扨
本口のまわり五尺と並合すまて弐尺
百歩と成是にのびるものもさ三丈九尺
とかけす坪九拾七万五千坪と成是と三
ツニよりて三拾弐万五千坪と成是割目安之
別ニ末口まわり弐尺五寸て並合す歩ニ六
百弐拾五歩と成是小並斗丈一丈九尺五寸
と並拾弐万千八百七拾八坪と成是と三ツニ

今唐木あり長さ三丈本口
まわり五尺末口まわり二尺五
寸是を三人に分ルとき切口
いし二すづゝにて他坪数ヲ
等分にして各尺数を問

答云



割四万〇六百弐拾八坪と成是ハ先ノ延
とあるり坪也と知べし 扨是をたゝく
三拾弐万五千坪ヽ内より引残て弐十八万
四千三百七拾五坪と得是を三人ニ割
壱人前之坪九万四千七百九十一坪六合
六夕六才充と成別ニ並長さ延とも三丈
九尺を弐度並合五九三二九と成是を
掛目安也 扨壱人前之坪九万四千
七百九十壱坪六合六夕六才小並の坪
四万〇六百弐拾五坪とくゝ人拾三万五千
四百拾六坪六合六夕六才とかる是ニだん〃

術ニ云本書の通ニして
もつ廣き丈九尺五寸を和元
もつ長き丈九尺五寸と加へ併ニ
三丈九尺五寸と再自因して得ニ
寸坪五万九百三十三坪九
千坪ニ別ニ廣き丈九尺五寸
と再自因して得ニ七百四十
三坪ニ千八百七十五坪ニ比
ふて四ツ減ず五千百九十
万〇四千百二十五坪わり肯
ツ切口ニ比ル好て寸と再
自因して八坪得て拾六坪
減ず余五千百九十万〇四千百
〇九坪と好て三因して得ニ千七
百弐十万〇千三百六十九坪六合六

無目安五九三寸九を引て八〇三二七八寸
二一〇四五四ツ坪ニ比ふて別目安三二五
ツ坪ニ別尺坪弐万四百七百拾六坪弐
合五夕ツ坪ニ比と同三法小除て弐丈
九尺寸三分ツ坪内廣乃丈寸丈九尺
入寸と引て減て九尺六寸三分い求の長
ツ廣 次ニ知ん右ニ十三万五千四百
拾六坪六合六夕六才ニ寸人前ニ九万
四千七百九拾寸坪六合六夕六才を加へ
弐十三万〇弐百〇八坪三合三夕弐才と
坪ニ比ふて右ニ無目安五九三寸九を引て

六六一ニ比ふ廣の坪七百四十
寸万四百八百七十八坪を加
へ併ふ弐千四百六十寸万六千
弐百四十四坪六六六六乃
実別ニ切口の二寸を自因ノ
四寸ニ比と六因三因ニして八寸
ツ坪ニ寸平紙ニ又右ニ二寸
と六因三因ニして四寸ツ坪ニ寸
と乃ニ天平紙ニ
扨右ニ寸平紙と寸ニして四
寸と乃考寸平紙ニ右ニ四
寸併寸ニして二寸と乃考天平紙
用三法ふ除得ニ高弐丈八尺九
寸弐分九ツ四毛ニ比内廣乃寸
丈九尺五寸減ず余九尺四寸

拾三六五五七二八〇四五九〇八ツ坪ニ比と
右ニ別目安三二五ふ別四万弐百
〇拾七坪六合弐夕四才七れ余ツ坪ニ比
平三法ふ除て三丈四尺七寸六分入り
減ず内廣三尺寸丈九尺入寸と求れ
分乃ち九尺六寸三分ツ引て減て入尺
六寸三分五ツ中の五分九ツ坪ニ比
扨廣寸丈九尺入寸三角求と中
乃ち寸と引て減て四尺弐寸三分入り
い寸四ツの長サと知べし坪数
と乃中ニ寸三角乃術を用ひ

二分五り四毛八毛〻口の方の竪
ゟ り又紙乃紙の高二丈四尺
六寸毛分九り八毛七毛内
定高の二丈八尺九寸三分
乃乃口し切口の二寸拾七減
出余五尺四寸九分四厘四
四毛七八中乃竪ゟ り迄長
の内ゟ りあし紙高二丈
四尺六寸毛分九り八七毛
切口の二寸拾七減出余四尺毛
寸八分〇一三八毛四の方の長毛
尺、闕三尺〻引換へ
定実に二ホ四百六十毛万六
千弐百四拾四坪六六六六ホ
毛ヲ

二紙口矢

右四定由ヲ以テ曰

松木八拾本　代銀合弐貫七百九拾目
檜木六拾本　松ちゝ重と日ふ
松木百廿本　代銀合弐貫三百廿二匁
板木四拾本　松ちゝ重と日ふ
板木九拾本　代銀合毛貫九百廿二匁
栗百八十本　栗檜ちゝ重と日ふ
栗百弐十本　代銀合四百拾九匁
檜木七本

右〻檜松板栗各毛本ニ付代銀

檜木毛本ニ付　銀三拾八匁
松木毛本ニ付　銀拾九匁〇八厘
松木毛本ニ付　銀拾三匁
栗木毛本ニ付　銀毛匁四ホ八り
栗木毛本ニ付　銀弐貫三百弐拾弐匁
毛毛番〻松八拾本ヲ以百八拾五貫七百
六拾目ヲ以別ニ毛番の代銀弐貫七百
九拾目小弐番の松百弐拾本ヲ以三百
三拾四貫八百目ヲ以代内ゟ ちゝ銀ヲ
引残〻百四拾九貫〇四拾目ニ四番〻
檜木七本ヲ以千〇四拾三貫二百八

再自因之八百万坪実ゟ
減之　又今乃高に応ず紙
八寸ヲ乗して千六百坪実
ゟ り減之　又高ヲ自因
〻〻得二四万寸一ヲ以ヲ常
紙四すヲ乗〻〻十六万
坪実ゟ り減之別ヲ又今乃
高ヲ再自因して八百万坪
の内延の七百四十毛万四千
八百七十五坪ヲ減出余五十
八万五千百六五坪也　別ニ又
高ヲ切口二すヲ以合二丈〇二
すヲ再自因〻て得二八百三十
四万弐千四百〇八坪一ヲ以ヲ
〻〻代二八百八十二万七千五百三十

三坪と兩三法に除して得る縱
高二丈〇六寸六分八厘九毫
代内定面弐丈と減じ残余六
寸六分八厘九毫小考歩帯
縱四歩と乗二十六坪六分弐
厘定より減じ別小又定面
と縱のあと合四丈〇六寸六
分九厘九毫に縱のあれこと
定面と減じる残余六寸六分
八厘九毫と右乗得二千七百
〇六歩二八九〇二八九毫小考
又帯縱弐寸と乗得二五
千四百十二坪八七八〇八九毫
より減じ残余千六百四十
四万九千二百〇五坪四六八

拾目と小別小四面の代銀四百拾九
匁と乗毫小弐面の松百廿本とけ
五拾貫〇弐百八拾目と小毫小三面の
拵木五拾本とけ弐千八百拾四貫目
と小代内三〇千〇四拾三貫弐百
八拾目と引残千四百七拾貫〇七百
廿目と毫三面の栗百五拾とけ廿
弐万〇六百〇八貫目と小別小三面の
代銀三貫九百三十弐匁と乗毫に
弐面の松百廿本とけ弐百三拾三貫
八百四拾匁と小毫又三面の拵木五十本と乗

五五寸小あり
二〇三高小八尺〇三右〇術に
〇〇〇法の残余二百二十分
三千〇六拾七坪六八二四寸五毫
三〇三高九寸〇三右〇術にて
法の残余六万九千八百八十
三坪六九五四寸に五
四〇三高二分〇三右〇術にて
法の残余三万四千九百六
拾六坪四三四四寸に五
〇〇三高四厘〇三右〇術にて
法の残余千二百〇八坪四三
六二七五寸小五
六〇三高四毫〇三右〇術にて
法の残余百〇四坪三九四六

三万千五百九拾弐貫目と小毫と又
四面の栗百廿本とけ百三拾九万千〇
四拾貫目と小代内三〇千〇百拾七万〇四
六百〇八貫目と引残百拾七万〇四
百三拾弐貫目五毫と寸〇三毫別に
三面の松八拾本に四面の拵木七本と
け五百六拾と小又三面の栗百八十
本とけ八万四千と小又弐面の板
四拾と小けて三百三拾六万と小又別
三面の乃拵木八拾本に四面の栗
百弐拾本とけ六千と小又三面の

六九五五六不足也
此則定高弐丈八尺九寸二分
低高三丈四尺六寸一分九八七也

二組四色別法之組九角
の高付八組合の次第あり
㊀松八十本 ㊁杉四十本 ㊂
栗百八十本 ㊃檜木七本
合うみ合く本数六千四百
八十万本なり
㊃栗百廿本 ㊂杉九十本
㊁松百弐十本 ㊀檜八十本
合を合て本数三百三十六
万本なりとなり内より
減少余 ㊇六千百四拾四万
杉九拾本となり八拾四万なり又二番
の松百弐拾本となり六千四百八十万
代なり三番の檜木五十本なり別の本一本
代知なり四番の檜木七本と越なり

なり此ならば別月安ら
㊀張弐貫七百九拾目なり
此に㊁松百廿本㊂杉九拾
本㊃栗百廿本合かけく
㊇一ノ張三百六十一万八千八百
四拾貫目なり ㊁張二貫
三百廿弐本なり此に
㊀松八十本㊂杉九十本
㊃栗百弐十本合掛て
㊃二ノ張弐百万〇〇
六千弐百〇八十貫目也
㊂張十貫九百廿二本と
なり此に㊃栗百廿本
㊁杉四十本㊀檜八十本合
掛て㊇三ノ張七十四万千

二組三色

四番の張の内引残りと四番の栗百廿
本なりしなり栗十本の代張と知也
古田光由好ヲ曰
檜木弐本
松木四本 三色張合弐百弐十目
杉木五本
檜木五本
松木三本 三色張合弐百七十六匁
杉木四本 とのくたり張と四匁
檜木三本
松木六本 三色張合 三百目
杉木六本 とのくたり張と四匁

八百八十貫目となる ㊀ 張
四百十九匁五厘に ㊂ 栗
百五十本 ㊁ 板四十本 ㊀ 杠
八十本各掛て ㊀ 四ノ張
二十万〇千百二十貫目と称
扱 ㊄ 代合級二口合四百三十
五万七千七百二十八貫目也
又 ㊇ 代合級二口合二百二十
万〇七千三百二十八貫目也
是を角かと減じ残る武百十
八万〇四百貫目為実之也
目安 ㊄ 六千百四十四万七
千〇〇〇実と除得三拾万石
也 此かゝる内ち橋を本の代和
なり 此かゝる内ち三
也〇〇〇〇〇〇

扨橋杠板をのく寸に付何程と
手間賃 杠本末に付 張 三拾目
扨中の橋入なを二張 橋二なを中の杠三なを也
中の橋入なを中くらい寸を武分五厘也
と始く杠四なの内より引残て二なを八分
是を別に始く橋武なを中の板四なを也
中の橋入なをくらい寸を六分五厘
是を始く板入なを角より引乃ちて
三なを四分わり板中の張始ひの本

三組三色に二組二色不義
よりに重重と為て組合
と分に張らるゝ也
組もその毎に色々
てくゝと考え合に
重の術なるもの波古
田氏始く三組三文と
に中一組小角にく張
ぐりにく弓重和重始
なりちくゝなるゝ変えよ
し又別小組合の時和に
ちり和ひくゝに先を寸
え三と変に記重也

末 ひの本三なを 杠六なを
板六なを 代張二百目

武なをを中の橋入なを百十五
五厘也を始く張角より引残く百拾
五なを 板入張の橋三なを中の杠三なを
を張の杠六なを中の角より引残て
四なを武分五 別に張の橋三なを中
の板四なを中の橋五なを中の
武なを四分五厘也を張の板六なを内
ちり引残て三なを六分五厘中の
張く張の橋三なを中の橋本
入なをくゝり百六拾五厘也を張

代金中の松たなそれ右
とうり付くゝい松きなに付る
ひの木いゝ分松いきなゝ
代銀ハ又十目ゝ亀

酒　ひの木弐ケ　松四ケ
　　松五ケ　代銀二百廿目
代酒一組の松四ケ
うり付とゝけゝいひの木
二ケ松いロケ代銀ハ弐百目
松ハ亀ゝ四ケ代分ゝ引
れゝい松きなと銀廿目
渡ル也　其ゝ松きなの
代弐拾目と又ハ也
又引ゝゝ三ゝゝ酒きな組
ハ分と紙きな組ゝ内ゝ引

銀ゝ内ゝ引渡ゝ百三拾ハなハ
ゝ紙の代銀ゝ紙ハ中ハ皆拾ゝ
渡ゝ分二組二ゝゝ
拾　松二ケ八分　松三ケ四分　代合百拾ハ
紙　松四ケ二分　松三ケ六分　代合百廿八ハ
松ケ紙ケ八分と紙の銀百三十八ハ
亀三百七十八ハ　又紙の松四ケ弐
分と拾ゝ銀百拾ハ四百六十弐ハ
ゝ代内ケ　三百七十八ハと引渡て
八拾四ハ亀と実ゝ亀引　又拾ゝ
松弐ケ八分ハ紙の松三ケ六分とけ

松弐ケ松きなケ代銀八拾ハ亀
と又酒一組の内ゝ引ゝ
組ゝのゝ二度引れゝい
松二ケと銀六十目渡る也
紙ハ二ケ松ゝ六十目とゝ
松きなケ弐十ハとゝ
右ゝゝ三ゝ形ゝもに
中一組小樽ゝ也

二組三色と三組三色ニ五合
ひゝ三
ゝね三ゝ
合　ねの十五　代合百九十九ハ九分
ゝゝ三色

拾ハ○○八ハ　又紙の松四ケ弐分ハ
拾ゝ松三ケ四分とけ拾四ケ弐八と
松代内ゝ右ゝ拾ケ○○八と引渡て
四ケ弐分亀ゝ実の八拾四ハと
ゝれゝ松きなの代ハうり
ひの木松の代銀と知る事ハ右ゝ二
組四色の酒と同ゝなる也一ゝ
暗ゝ

右田光由好ゝ
ゝね三ゝ
ゝね八拾　代合弐百七十八ハ八ト

②③
さね二丈
合布二端　代又百十匁
さや又壱

①②③
さね壱丈
合布十端　代七百廿八匁六分
さや又壱

右ヽ毎にそれ合しく紬の
布十端ニしてさね壱丈とさり
さや四壱とさり代六百九十
九匁九卜とさり中の布二端ニ
並しハさね六卜　さや八卜　浪
百三拾九匁九卜八りを匁をと
中壱を紐より引残り
さね壱丈四分
さや四壱　二分　代三百十壱匁二厘

二紐三色

ぬの弐端　此代合四百弐拾壱匁四卜（ぬのたし壱と引かお）
さや四壱
さや壱々　此代合八拾八匁六卜（さやさねたし壱と引かお）
さね四丈

右ぬのさねさや色く壱疋行積そ
さね壱丈ニ付　浪三分
予并しぬの壱端ニ付　浪廿四匁卜
さや壱々ニ付　浪八十八匁
法ニしてさね三丈と絹く浪八拾八匁
六分ニかけ弐百六十五匁八分と匁
別ニ絹くさね弐丈と絹く代浪弐百

又紬壱紐と絹壱紐内か
壱に引残り
さね二丈
さや一壱　代八十八匁六卜
相紬のさねと後のさやに
並壱丈四卜まり後の絹と
紬のさやにかけ八丈四卜之
此内たしく引残り七丈と
為法　又紬のさやと後の
浪ま並三百七十二匁下ニ了
と数文後のさやと紬の浪
小かけ三百七十匁○○ニう
と数是とおく浪く内より引
残り二匁壱卜と為実右く
法七丈まてまり絹壱丈の代

七拾八匁六卜かかけ五百五拾七匁と成る
此内引く右く弐百六拾六匁八卜をと引
残く弐百九拾壱匁弐分之是ニ中
のぬの弐反をかけ五百八拾弐匁
四卜と成　別ニ又中の代銀四百弐
拾壱匁四卜と並是に絹のさね
三ひきをかけ八百四拾弐匁八卜と成
是に又絹くぬの八端をかけ六貫
七百四拾弐匁四卜とかる此内そ
右く五百八拾弐匁四卜とひき残く
六貫百六拾匁わり是を実にかるる

三トして
右の如くひの数を乗じたる
い米弐石大豆三石麦四石を
乗ず時いつれも代銭百目
ゝ大豆ゝ乗じ米ゝ米ゝ大豆
を石ゝ麦ゝ大豆に麦を石ゝ
麦ゝ米ゝ米を石ゝ麦ゝいつれも
百目ゝ乗じ諸の売値を合
米を石ゝ 三拾六文
麦を石ゝ 十六文
大豆一石ゝ 二拾八文
麦を石ゝ 十六文
術ゝ先二組三文に組合
三ゝとゝ也

㊀ 米二石
大豆一石 代銭百文

そ始めゝさね三丈ゝ中ゝ乃ぬの弐
けんとゝとけをかゝ又紙乃ゝやを
をけ六ゝ 別にまゝぐめのぬ
の八ゝんゝ中のゝやを四を
に又紙乃ゝさね二丈をけ六拾四
とする也に右ゝ六をけゝ七拾
ゝする也ゝ右ゝ寅六貫百六
拾文をれいゝやを米の代と知
なり ゝさね布の代を知い弐組
四色の術と日ゝ乃ゝ有ゝ寅に略し

㊁ 大豆三石
麦を石 代銭百目

㊂ 麦四石
米を石 代銭百目

右㊀㊁㊂合米二石大豆
四石麦を石代弐百文
又㊁㊂合米を石大豆
三石麦又石代二百文 扨麦
麦又石ゝ代ゝ目組ゝ米を石
大豆三石ゝ代二百目をれい
麦を石ゝ米ゝ二年大豆云
年法ゝ四十文なり色おく
組ゝ麦を石にゝみゝく丈ゝ
ゝ有前ゝ組ゝゝ引のゝゝ
△米を石八年大豆三石年数

盈朒法

右田之由如云
今具足弐代と上る五丈と乗ゝく小
前弦拾三丈かゝんとをゝまゝべ小判五
あわせる又具足を倍と小前弦一
丈乗ゝく上る三丈かゝんとをゝまゝべ適足
也又上る六ひゝさと小前弦八丈と乗
て九足又代をゝうゝんとをゝまゝべ小
判ゝゝぶれ幸ゝ三あゝり右ゝ
九足上る小前弦をのゝく寅
代ゝつてそゝる
手者ゝゝ

代米百六拾六石六斗六升を組〻〻〻〻て又米を組へ元〻米を組と乗て

△米二石六斗を石代百文〻〻〻〻

正八加く米大豆八空俵麦
麦八五石代浪四百目と
拾石に百目とする石ごとに
麦一石ゝ代拾匁宛ゝ初也
右等あく術者也上り
元わりうとしくも或い
師伝よりまた或八出精
ちぐひ申ていう而
あかく全ゝ術之代
無之時帝也九月
五場代宜ゝ記伝
見今のよ之ゆ右一ゆく
上の米二石とれ一ゆく米
ちりは右一ゆの俵ニ入
俵ち米い二石大豆い米ゆ

今人あと今ゆ入ゝ今六あゆ引
残今ちあ之物ゝ入乃
上馬十四疋小荷結四疋ゆ七あ
今ちあ不足也　扨給ゝ上る六疋
小荷結八疋ゆ足五あと不足今ゝ
と一ゆゝ乃ゝ用てゝ口ゝ乃と集
之俵之ゆ色ゝ上る時

(初)上る六疋小荷結九疋ゆ足ゆ今ゝ
(次)上る之疋小荷結九疋ゆ足四ゆ今ゝ
(後)上る十四疋小荷結四疋ゆ足七ゆ今ちあ
如代ニ扨中時後の上る十四疋と初の

空麦い八石代い弐百ゆ
足と右一ゆゝ也小拾引
ちゝい米い四俵ゝ
引排空ゆ大豆い空ち
庄ゆ也ゝ石負ちゝ
麦い右ゆ空ゆ八石ち俵
ちゝ也沈ち百ゆ引之
沈百目ゆ代百ゆ
麦八石ゝ代ゝ負ゝ大
豆ち石ゝ代ゝ空ゆ
扨又中ゝ大豆ゝ今
ゆ之ゝ上る九一ゆ一とのゝ米
ちゝ之ゝ大豆ゝ石麦弐十
四ゆ代い三百ゆ上る
と大豆ちゝ俵ニ負

小荷結八疋ゝ付後乃小荷結四疋ゝ
ゆ上る弐拾八疋ゝ扨内初の上る六
疋ゝ引残ゝ上る弐拾弐疋乃又後ち
疋七ゆ代と初乃小荷結八疋ゝ付後
の小荷結四疋ゝ上る弐拾弐疋乃又後ち
扨内初の上る疋ゝ引残て九疋九
ゆわり又後の今ちあと始ゝ小荷結
八疋ゝ付後の小荷結四疋ゝ上る
今弐あゝ扨疋ゝ上る六の今ゝ
引残て今ちあ乃別ニ又後の上る拾
四疋ニ次の小荷結九疋ゝ付後小荷結

はまへ代れとまるもの中分のこんゆく引れて
宮こ表と代へ四面られ
中分のきたと百ゆくて表二十人の代れ口表
しるく別也

今白赤黒こ組二組あり
いつまも諸るの教と知
組白組こ内一赤組一組を
ゆくるて二分入黒組
をゆくる刻てきら分入こ
諸る百騎八諸ゆこ又赤
組こ組へ黒こと ゆく

足こくらう三拾七足半こ水内分
次こ上る三足とゆく引続く上馬廿八足
半ゆこ又後のゆこ七段小次小前左
九足とけ後の小前左口足こらう
ゆこ拾八面七分入りこ水内より次
ゆ口仍引続くゆこ拾一仍七人
ゆこ又後こ今きあと次こ小前左
九足こけ後の小前左口足こそう
今武面武半こ水ゆこと次こ今三面
分引続く今七半ゆこ組こ後乃分
ゆ拾り諸る分二組二色こ水

うこくる三分入白組こ
ゆかこうこ赤きう分入い
一い諸る百武十八諸ゆこ
又黒こきの内白組こゆこ
こうこくる三分入赤ここと
ゆこ刻こくる赤う分入こい
諸馬百三十武諸ゆこ
き組こ諸る教こ

白組一組 八十四諸
今こ赤組一組 六十八諸
黒組一組 八十武諸
御こ無こそれこ汎を
白 赤 黒
初 ||||| ||| | |||||
一 ||||| 諸馬

初 上馬武十二足 ゆこ九領 今きあ
次 こうゆ八足半 ゆこ十一領七人 今七半
扱ゆこ上る廿二足と次こ今七半こけ
拾六面人こ水別こ又次こ上る廿八足
半こ初の今きあこけ廿八面人こ水
山内より右こ拾六面人こ引続く今
拾武面ゆこと実こ亟別こ又初乃
上る廿武足こ次こゆこ十仍七人こけ
初教武百人拾八半こ水 又次こ上る
廿八足半一初こゆこ九面こけ初
教武百人拾六半こ水こと右こ内分

中　白　赤玉
　　||||　|||　||||||||　一
後　|||　白　赤玉　|　||||　||||||||　一

扨初白四を中のきりかへ
とりくゝ乗して白いは赤い
十六玉い十二籌ろいは百十二
籌代内より初一ゝ代と減白い空
△赤い十三玉い十一籌ろいは三
百六十四籌ゆゑ又中一ゝ代へ
後ゝ白三を色乗白い三
赤十一玉九籌ろゝ三百八
十四籌代内より後ゝきりかへ
減ゝ白い空▽赤ゝ十一

引籌て扨教こゝ五ゝ左ゝ交
とゝれい色玉ゝ代内の代金六あゝ知
扨又上ろゝ玉足の代金と知ゝ日
安ゝ右ゝ扨教或ゝてゝゝ用ひ
初ゝ色玉九あゝ次ゝ金七ゝ
金六あ七ゝ玉ゝ別ニ又後ゝ色玉十一
代七ゝ玉初ゝ金ゝあゝ金十一あ
七ゝ玉ゝ代内より右ゝ六あ七ゝ引
籌ゝ金ゝあゝ左ゝ目安ゝ扨
教こゝ上ゝゝ上ろゝ足の代金と知足
又小籌籌ゝ足の玉減知ゝ中籌ゝ

玉い又籌ろいは百五十弐籌
ゝ代ゝ二組二色術也
△赤銭十三
玉銭十一　籌三百六十四
▽赤銭十一
玉銭五　籌二百八十二
扨初ゝ赤ゝ後ゝ玉ゝ
六十又ゝ玉　又後の赤ゝ
初ゝ玉ゝ百二十一玉
代内ゝ右ゝ六十五ゝ引籌
五十六ゝ扨　別初ゝ
玉ゝ後ゝ籌ろゝ色弐
千七百七十二籌ゝ玉又後ゝ
玉ゝ初ゝ籌ろゝ上ゝ千台
二十籌ゝ玉ゝ右ゝ内ゝ

上ろゝ五足一上馬の玉後弐あゝ無
拾弐あゝ玉　別ニ中籌ゝ色足
弐代ゝ色足ゝ玉後六あゝ色金拾
二あゝ玉ゝ代ゝ二口重合弐十口あゝ
玉代内ゝ籌ゝ籌ゝ
籌て拾九あゝ色ゝ中籌ゝ
拾三足ゝ玉ゝ小籌ゝ
右ゝ代ゝ籌ゝ足の代金ゝ知
人ゝ上ゝ
吉田光由好之
小小堰ゝ境時小代ゝ人ゝ玉ゝ百拝ゝ代

引残り九百五十二歩あり
是を右の法五十六よりれい
赤銭一組に四分一に歩る
十七歩と知る是に四をかけ
六十八歩と知る
黒ノ四分一八十三歩
白ノ四分一八五一歩

方田

かき立て盈朒別法之

初賣 是を二位 上る五足 賣小荷十二 外全高
小荷を一足
中賣 是を一位 賣上る三足 遠近之
小荷を一足
後賣 上る六足 賣是を五位 不足三歩
小荷を八足

扨求る是を五位なる一組
とれば是を足を代て上る一
足二分 小荷を足六分代
全六分なり此なり外を初
是を二位小荷を上る二足
四ト小荷を三足二分代を
求る二歩此一歩なりを初
組る拾引残る時上る足加
る小荷を代全に引

代 上る七足四分
小荷を九足八ト 全三歩八分

扨又右なる外を中の是
是一位を無い上馬に乗足
二分小荷を一足六分代全
六分なる歩此一通を中の組

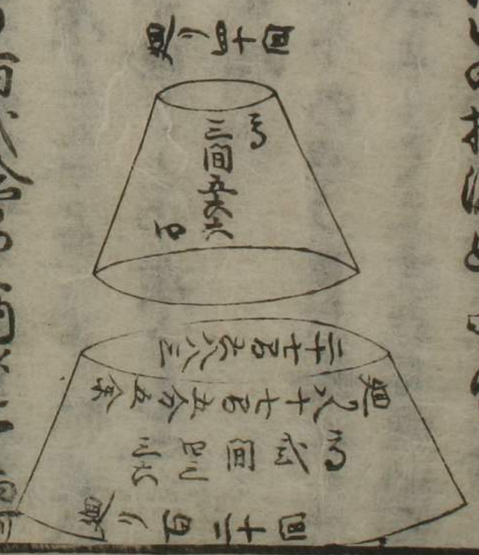
扨別に又下度を拾ると一歩ノ
六拾ノ歩此小に拾ると歩此
寄て歩此を右の角より引残く千九百
拾六歩を三分に分て是を云に
九百六拾六歩六分なり歩此と定に
是 扨下に度を二十ると常組に成人
て家平法小除を上の度を高也

古田先由なる

上廻り四拾ノ下の廻り百弐拾ノ
六ノ角 ノ時小代上にくた千弐百坪切て
れ ノ時に上より代を切下ルを言

ゆくゆく引きる時上るを
引小為たいらゆく代金も
ゆくゆくて
上馬一疋八分
代 小為を二疋六分 金六分
右二組二文ゆくして初の
上る七疋四分と後の小
為を二疋六分にゆみ十九疋
二分四りゆく 又後の上馬
を疋八分と初の小為弦九
疋ゆくゆみ十七疋六ゆくゆく
と右の内より引残り△を疋六
分ゆく法之 別に初の上るを
後の金に無四あ四ゆく
後の上るに初の金をゆみ

碁



又れに加同切口の拾波四りを
平ゆくゆく
法ゆくゆく下り四り百弐拾ゆく内より
四拾ゆくと引残く八拾ゆくゆく
ゆくゆくて一三三三三ゆくゆく
上四り四拾ゆくとれいゆくゆくゆく
のびゆくゆく 扨下の四り百ゆくゆく

六あ八四ゆく代内より右
四あ四四ゆく引残り弐あ四と
右ゆく法△を疋六分ゆくれい
金を四五ゆく代小為を一
疋の代ゆく又ゆく初小為を
と後の金ゆくゆみ又あ八八ゆく
又後の小為を初ゆく金よ
ゆみ九あ八八ゆく代内ゆく為
しゆく四八八ゆく引残り四ゆくれ
為ゆく法△を疋六分ゆくゆく
上る一疋の代金二あ八ゆく知
り
方産之別法ゆく
六五千六百坪を二因して
を方六千八百坪ゆくを

四法之一六二ゆくゆく拾波三十七ゆく九
分八四ゆくを引残り金千四百四拾弐
〇二ゆく〇二五ゆくを四九ゆく
無雍法の二ゆくゆく四千三百弐十坪
〇六分〇七も八弐ゆくを別目安也
別に上ゆく四ゆく四拾ゆくを為四法之一六
二ゆくゆく拾波拾弐ゆく六分ゆくゆく
を四ゆくゆく合百六拾弐〇〇二四二も八
ゆくを四ゆくゆくのゆくを三ゆくゆく
雍法之ゆくゆく百六拾坪〇〇二ゆく二
も八ゆく別又坪千二百坪を為法七九

る九るゝゝ千八百六十六歩六分六厘六毛と水別に下く廣三十間と自因して九百歩なる内より引残り九百六十六歩六分六厘六毛を為実　扨下廣三十るを為帯縱寄平法に除とる方十九るゝ八分三厘余と知也

実意と別法之

中書に曰砌と求る也

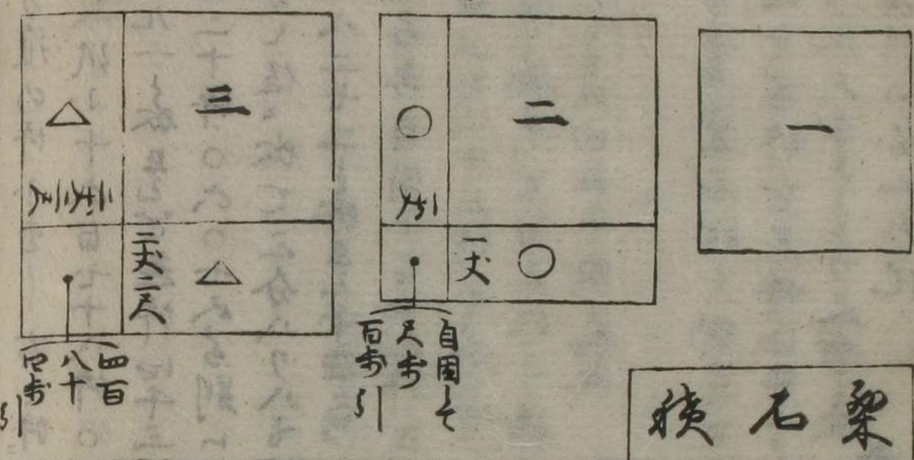
〇こゝに方と知也方程の坪四十三百弐十坪〇六〇七八と知て也の方程の坪百六十坪〇〇二五と知別に水千弐百坪を実法とし除る

〇八ゝゝゝ千八百拾八坪〇三厘六毛六水毛を也ゝゝの坪ゝゝ千六百七十八坪〇四厘九毛一糸水扨也ゝ也九百弐拾九るを弐段ゝ合七百弐拾九坪ゝ水毛を今の千六百七拾八坪〇四九ゝゝ毛ゝゝ糸ゝ別百弐拾坪〇六分〇七毛八糸ゝ別る坪弐百八拾三坪を分三厘〇九七ゝ水毛と実に亟寄三法に除さ六るゝ八分六厘六毛四糸ゝ水毛いゝゝゝ也一小内ゝゝの也

方程の坪小也〜右ゝ坪加一代小千六百七十八坪〇四九一ゝ水毛を也坪四千三百二十坪〇六〇七八ゝ別い分ゝ位ゝ水て二分八厘八毛三八二七二ゝ水毛小也ゝ九ゝ再自因七百廿九坪を也二百八十二坪を分三厘余ゝ水毛を寄三法小除也ゝ也切ゝ別ゝ数ゝ知也

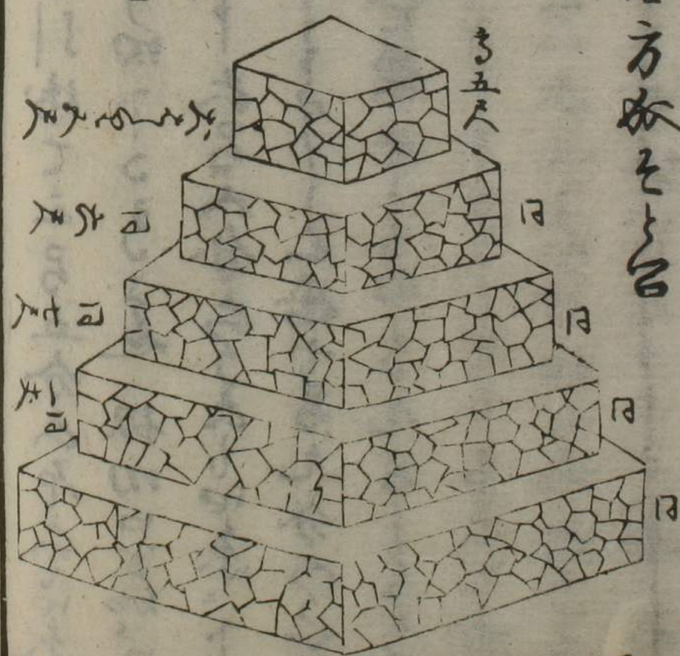
中書に曰栗石積ゝ術を法を五坪を尺坪小也〜ゝ水其代ゝ術也代一

三ゝを引残て三ゝ五分六厘六毛四糸ゝ上ゝ厘切下ゝ厘ゝ也　扨切口と知ゝ右ゝ八中六ゝ八分六厘六毛四糸ゝ下ゝゝゝゝゝ三拾七ゝ九分六厘を也毛を也也ものゝ九ゝゝゝ切口のゝゝゝゝゝ



梁石積

八段積上ヶ下より二段目の大きさ廣さ七丈三段目い七尺四段目い六尺八段目いハ尺小積て下ノ廣さと上の廣さと何程四方ぶそろ



私に加同

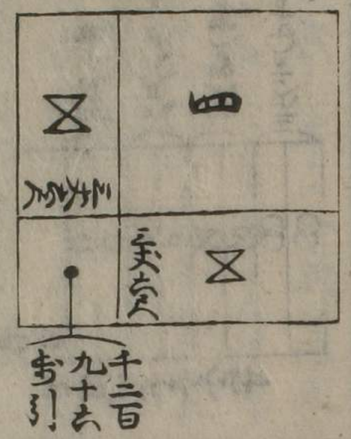
上ノ二段 六丈二尺八寸○三厘八毛

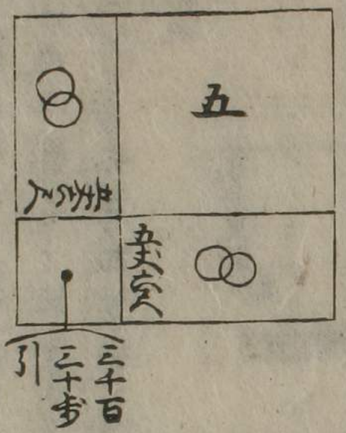
同三段 七丈二尺八寸○三厘八毛

同四段 八丈五尺八寸○三厘八毛

同五段 九丈九尺八寸○三厘八毛

何程廣さ 十一丈九尺八寸○三厘八毛





右隅ゝ歩を引おゝる歩をかゝる列ゝ歩数又ハ書に拾二丈四尺と

上之段方 六丈二尺八寸○三厘八毛

二段目方 七丈二尺八寸○三厘八毛

三段目方 八丈五尺八寸○三厘八毛

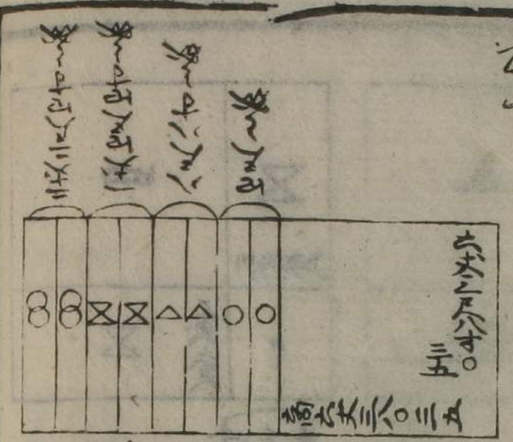
四段目方 九丈九尺八寸○三厘八毛

五段目方 十一丈九尺八寸○三厘八毛

法ゝ七百八十坪ゝ五厘ゝ毛坪ゝ尺坪法式百七拾四坪六分弐り八毛と五尺坪式十万○八千九百六十八坪七分五りゝ毛

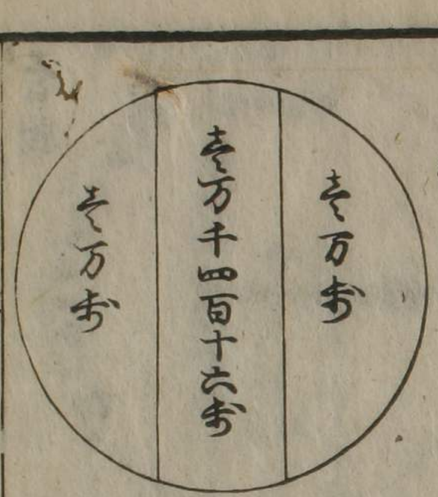
ゝる八尺ゝゝゝゝゝ尺歩四方千百五十ゝ歩七分ゝゝ毛別ゝ上より二段目の大ゝ

ゝ八尺とれたゝゝゝゝ丈ゝ



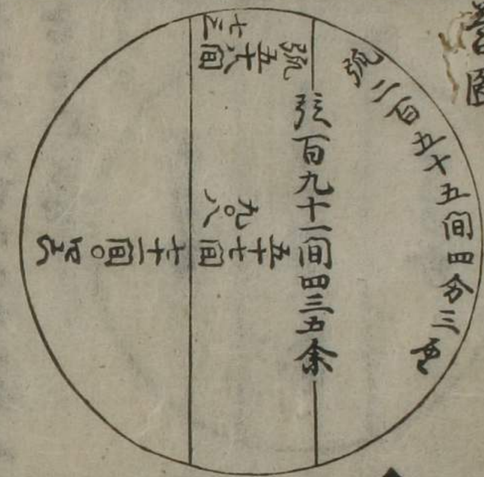
又此のうち武丈又六丈を割
て八ツもはこぶ時は
丈をもつてはたらくを信ず
るは法小上のうち割て
又六尺小割ると相乗して
一丈ごとの平米紙家平家
也

五合百歩と成 又上より三段めは
六丈をとれば石ゝくを丈二尺に
拡ると小上の三丈を乗 武丈二尺と成
丈を五合四百八十四歩と成 又上より
四段めの丈を七尺をとれば石ゝくを丈四
尺と心得る小上の武丈武尺を加て
三丈六尺と成 丈を五合千武百九十六歩
成 又上より五段目の丈を六尺をとれば
三丈を乗れば石ゝく武丈と知る上の三丈
六尺を加て五丈六尺となる丈を五合
二千百三拾歩と成 扨此四の歩数



歩数を乗ると平武四角也
ゝゝゝ負数と大法斗
い変小法作る也 歩法七八五
四と斗別して好ていろく
今俗武百ゝ平方地と
必寄れたい三万歩て中い
三万千四百十六歩小分に付
名ゐ数と名

五合五千〇拾六歩を石ゝ四方千
百九拾三歩七分八厘と角ゝ引残て歩
三万六百七拾七歩七分八厘を五
段ゝゝ七千武百三拾五歩八分八厘と
成ゝゝ 扨三丈と武丈武尺
成ると実と乗 扨三丈と武丈武尺
と三丈六尺と三丈六尺を五合拾武丈
四尺と成ると成のうち武丈五尺を
てゝゝ四丈九尺六寸と成ると平紙
小用石ゝ実と開平法と除き上の
四方と知ると知さて段ゝのたゝ中あら
次第小ゝゝ下ゝ段ゝ四方と知さを也



答図

術に曰く中の步数を方千四百十六步を実に乗じ径弦百五十五間四分三厘の法実と一相除くべしと又十五を以て弦径弧矢弦を求めて得三弧矢三五一七八二四弦百五十五間四分三厘の法を求めて得百〇五步六七〇五厘

右田光由好之

拾渡百間と底変と二人一ツ宛渡す時
壱人い武千九百坪 壱人い武千八百坪
壱人い武千八百坪 小より矢の廣さ
弦と壱さ何程そ又中の矢の廣さ
弦と壱さとの〳〵何程そ

私加問 小ノ弧 南ノ弧 西東弧
各何ほどそ

答 坪七十九百坪

予答之如器

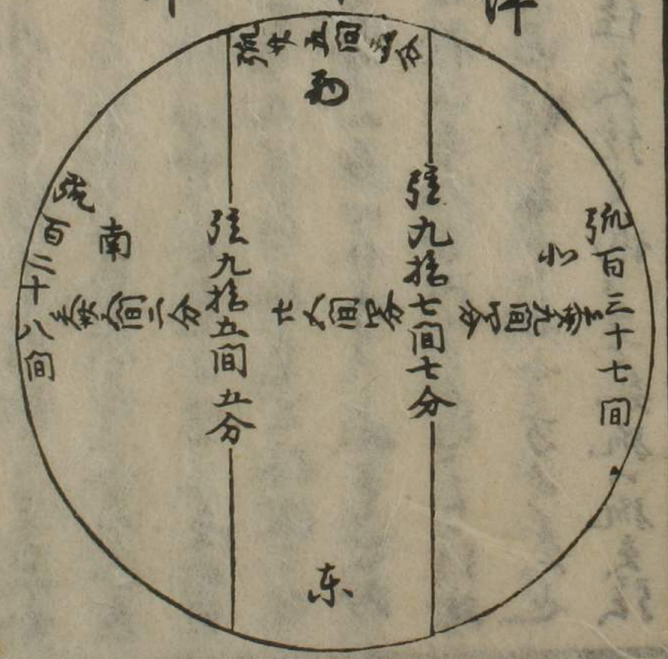
矢三五一七八二と弦八十五と相乗して得二百八十八步七七一八四六より左を步数と

積 截 答

二千九百坪

二千五百坪

二千五百坪



法を坪七千九百坪と小と武九百坪とそろ二七二四六を一倍して坪八六別に拾渡百五と無合一万

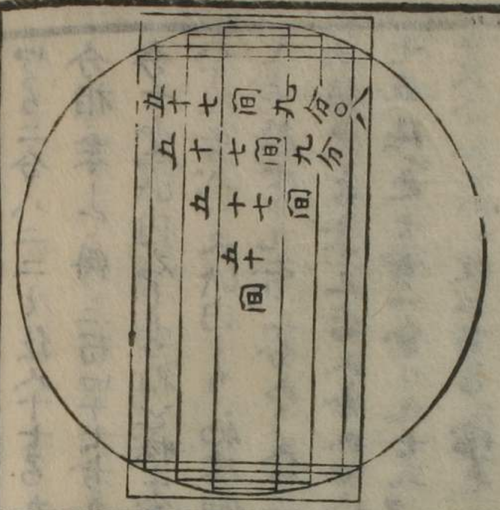
乘して得二百三十六歩三九
三二五一以内より五歩を減ず
減歩余七十九歩三分の五を
二五又以内和加し五十三歩を
分減歩余二十六歩一分又又を
二五と倍し五十二歩三分一〇二
又実三〇〇以二法二百五除之
△定二ノ高七五也実二百七十四
歩又一〇二又五又以法ヲ一物の
ごく也ノ三ノ高九分と又三
也小和次ノ高と〇〇以小
又十七五九分と乃弦住矢弧
小して得二弧矢五八五七二三二也
法籟歩法して得二百六十五
歩を分三〇一ヲ列ニ今の矢

坪と歩を〇〇五四四八〇〇千八
百三十八坪八合八夕四才歩を〇〇平法ニ
除之四拾弐五八分八厘歩を〇〇
歩を分三又十五三内より引術して七五一分
〇〇五也小右〇四拾弐五八分〇〇也
三百〇六坪四分〇歩を小方と為の垂
法を〇〇二五〇〇みて扱也〇〇拾渡し百
五〇〇〇〇三五四分〇〇三歩を〇〇
廣の四拾二五八分〇〇三内より引術
して三十九五四分〇〇也小方ノ矢也
扱弦ハ住矢弦〇術五て知弧ハ弧矢弦

五二分八二二と弦又十七五九
分相乘して得三百四十七歩九
分七厘以内を歩数と減歩余
八十二歩八一又以内より和次加
し歩数七十九歩二分〇〇三二
五減之歩余三歩又分又四八
七五法之七歩一分〇九七五
実小加一以二法二百五除之
△定三ノ高九分也実二一歩
〇〇分〇〇五又以法物除之
〇〇高〇八毛と又三て右〇
の術小して△定四ノ高八毛
と知也然則中央の矢又十
七五九分〇八毛也是を題注
云百五内より引のこり

乃術を知し
扱又南の方の矢と知し矢坪七千
九百坪と南の弦千又百坪を〇〇三一
六〇〇歩を二倍して六三二〇歩扱拾
渡百五〇〇合方坪〇歩を〇〇
六三二〇〇〇千又百八十二坪二合五夕
七才〇歩を〇〇平法ニ除之三拾九五
七分八厘〇歩を〇〇拾渡半分又拾五
〇内より引術て拾五〇弦分弦厘之
〇〇歩を二〇〇三拾九五七分八〇〇と題四百
〇六坪五合六夕〇歩を三方と為直法

圓徑十二寸〇九厘二毛と云
ふ寸九分の矢七十一寸〇四分
六毛九と知る
右矢徹之術又之如
此弧矢弦し矢法考者
之ふ寸毫の率にふん此



きを二五とすけ扱毫を拾渡百寸
ふ寸四寸五分八厘と毫毫をお毫の内
九寸四寸七分八寸に角寸引ふく二拾八寸
二分五毫毫おもふの矢と知る弦の往
矢弦扱又弧の弧矢弦こ術にて知へし
扱矢弦寸の内の方角信のごとくこまかい
毫寸〇疑ひをふへしきふ〇ふ毫
い矢法指引ちげくしく或の不を変
きふ寸ひを止余矢くさる西の寸
此者商教と又合厘毛にて加減五
だし毫毫者のふふ毫奥をつれ遠

ず書ふ矢術ふ口伝し
法わふふい弧矢弦の
ふ法の率ふ厘志立て
日乗考動と又ごと法ふ
ふふい又中と以ふも毫
ふふまごふ工夫ふふ者
也

わふふ法法と知へし和法術ふ口伝
法わふ勤士ふ毫て吟味五へし

右此者の始に泥いどく教ふ者五
青ふふ毫ふ者術伝へ法ふ者振に
ふ吟味五へし何事もふの分
ごふのまふ西毫ふ西毫しと
ふまいていふ毫へ法も五
ふのれいは門ふ者士と伝論
五て無とふく毫と用法ふ五ふ也